西遊譚　壹

共五

ル 3
28
1

東京學校圖書
門 八呂 3 號 28 卷 2

西遊旅譚序

余嘗遊於伊豆浴乎熱海而登于日金山山上有小山曰圓山前抱天城之峻後負函關之巖右富嶽之皚〻左巨島之圜〻俯察衆山之崱嶷周覽羣嶼之峯屼立觀十邦坐辨八極實東海之絶勝也而天下之奇觀也乃探篋裝操筆硯將畧圖真形以示於同好及臨紙醮

筆若存若亡無由下毫於是釋筆喟然
嘆曰吁嗟聞之古者善畫有舍筆松豈
不信然哉頃闢友生江漢司馬氏齋其
所著西遊旅譚諗余題其篇端開卷閱
之則遊乎西邦之記也其所經過名都
樂國神宇梵屋靡不采覽異言殊辭童
謠歌謳靡不畢載閒之以圖畫以便其
觀覽因試案其日金山圖崎嶇嵳峩堂

泱鬱紆髣髴若視其處怳惚若在其所
復亦嘆曰寫真之妙一至於斯乎余雖
未西遊也覽其所已觀而信其所未遊
昔者有為齊王畫者王問曰畫孰㝡難
㝡易曰犬馬㝡難鬼魅㝡易犬馬旦暮
在人之前不可類之故難鬼魅無形無
形者不見故易司馬氏是舉也演風俗
之美惡圖地形之險易皆考實按形之

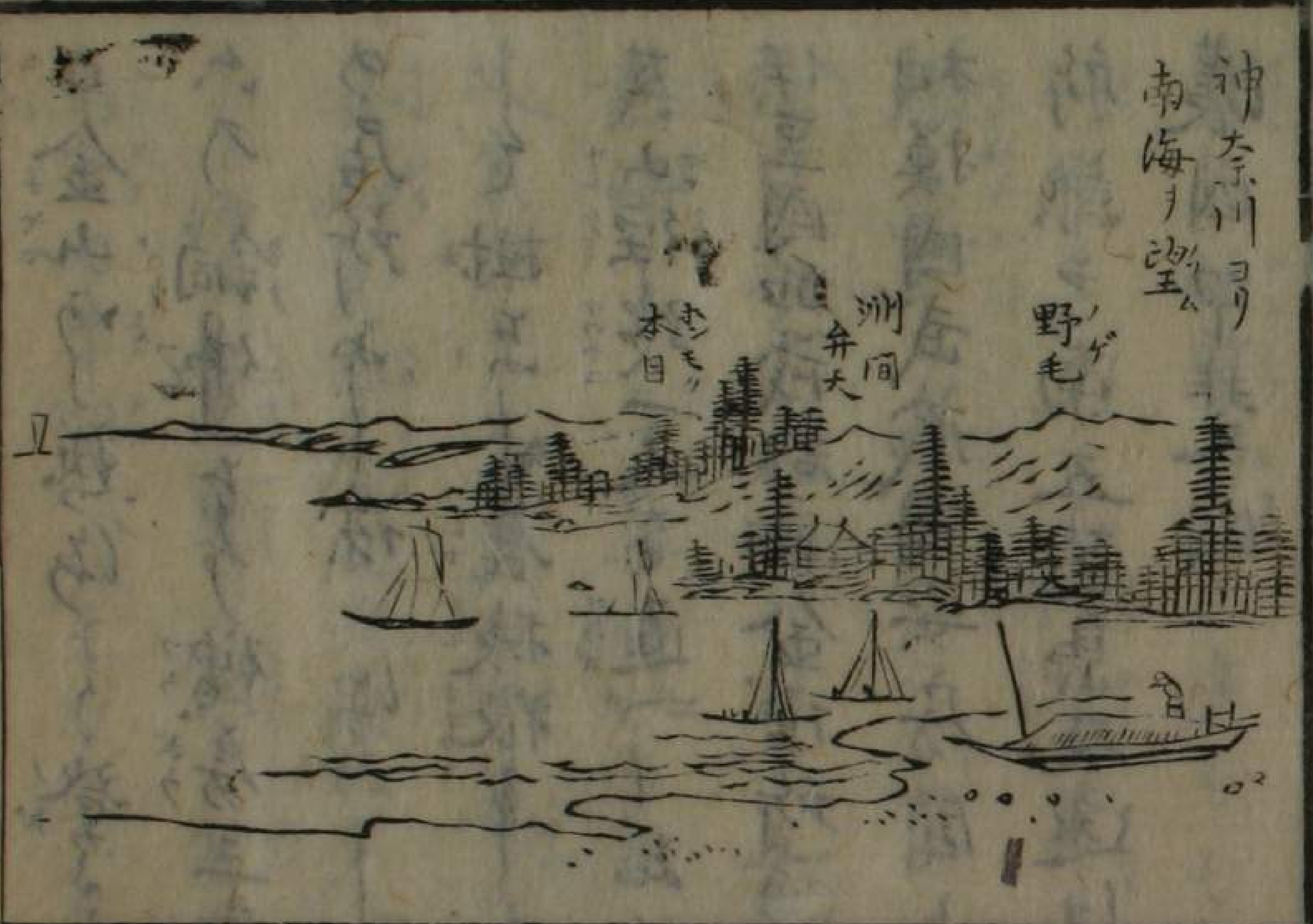
事也豈特犬馬之難哉若夫使斯文遣
輶軒之使以為奏籍亦必為洽見之奇
書不刋之碩記也曰以是為序云
寛政甲寅五月戊申

福山　太田方撰

西遊旅譚巻之一

天明戊申の四月廿三日芝門を發して神奈川乃
驛に至る青木町より右の方山に登る熊野権現の
宮又飯綱の社あり夫より田畑をへて一本松とて
小高き所あり是より眺ば南蒼海をのぞむ海
中に洲あり乃天女の社あり其向ふハ野毛。本目。十
二天の森をみる。東の方筑波山西の方富嶽に
對す甚の絶景なり

小田原乃驛より左の方に入豆州熱海へ七里みち



山中にしてたゝ方ハ海也大島初嶋見えて景佳し此山中大石多
石ゝと切出す（土肥又真鶴石ト云）近年伊豆御影石といふもの是なり此事三里余
土肥村より（田夫ノ家ニテ酒食ヲ商）これより熱海に至る本陣今井
半太夫方也園中より温泉涌出する事昼夜をわかたず
甚熱湯にして塩気あり此一村惣て温泉あまた
海中にもわき出る所あり夫より七八町東の方山路をこえ
て伊豆権現の社あり般若院と云其山下の渚辺に飛
泉あり殊に好湯也病を治る効験の事多し俗云
年ふりて嘉例あるを俗是を称して権現の湯といふ

日金山より熱海より登る事五十町頂に地蔵堂丈六の銅佛あり僧房三軒ありて肉食妻帯在俗人の居所なり殊に深山にして田畑不作只蕨小笹を生じて樹なし鹿猿狼多し夫より又登る事五町丸山あり其山径狭く一人を通ずしぬ絶頂なるも四方を望めば左の如し

伊豆國加茂郡日金頂所眺望者十國五島自子至卯相模國武蔵国安房國上總國自辰至申其國所隷之南五箇島及遠江國自酉至亥駿河国信濃國甲斐國

實に眺望四維に達すとあるの筆景なり画意に託すといへとも經營甚し

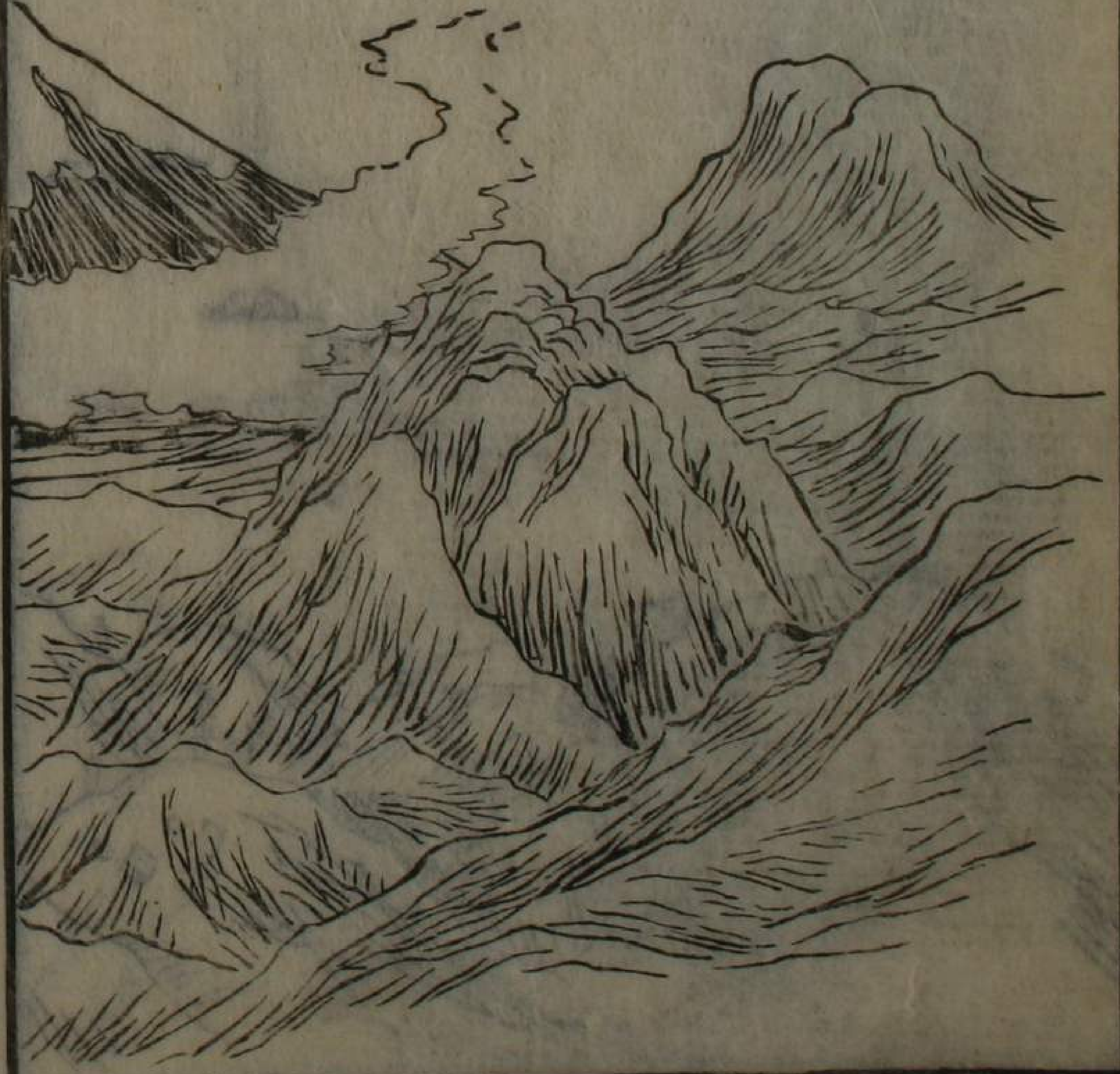
温泉より西南の方来乃社あり大貴己命を祠る總て此邊大楠あり十五圍の樹を見る

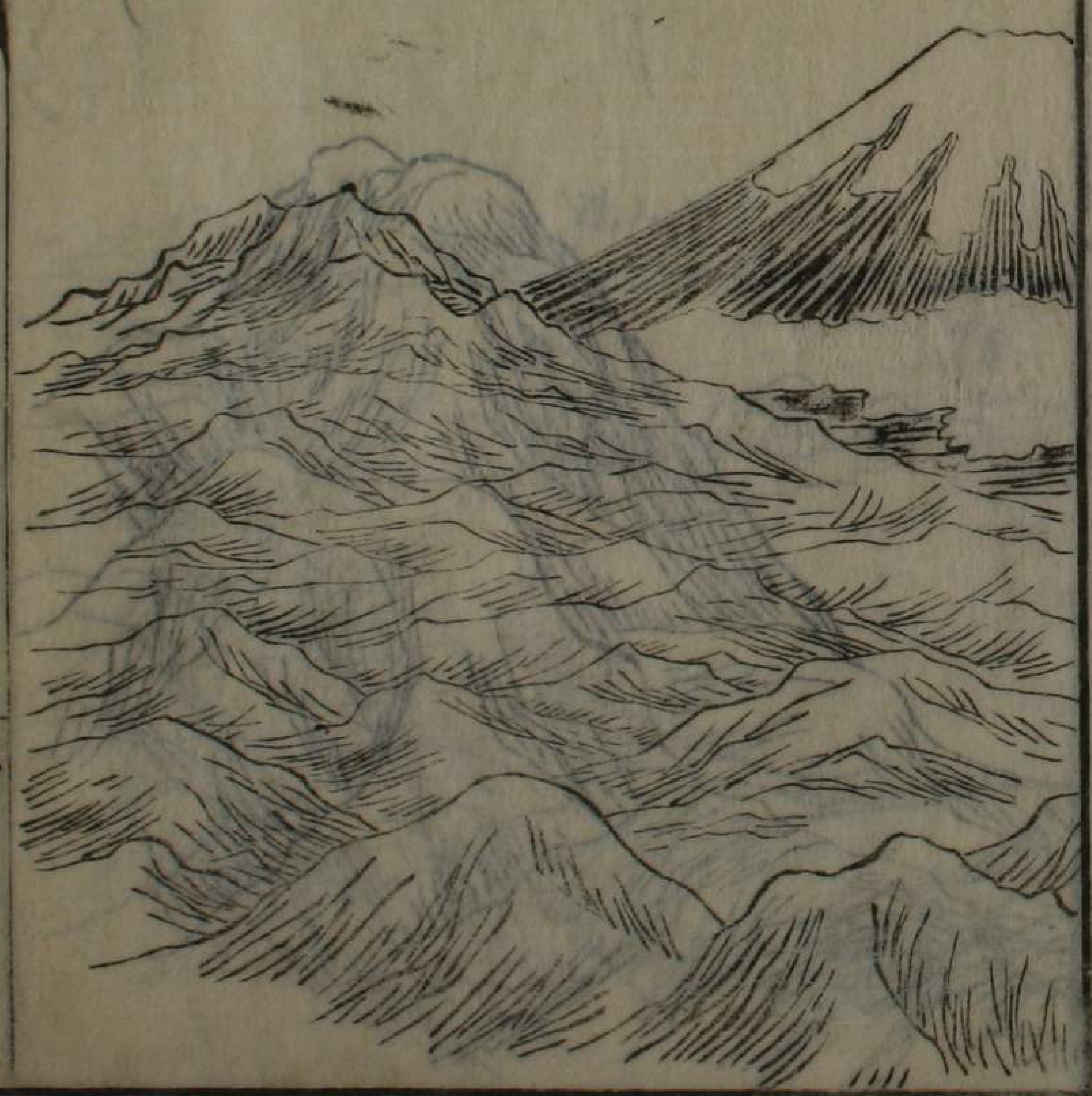
熱海より三島（往還道なり）の方へ越るに五里行り山中にして人家なし二里ふ登峠の地蔵あるの堂宇肉食妻帯其茅屋に老婆一人居る白髪を乱し火を焚て居たり傍に寛寞と寥々として人語の響音なく深山幽谷も事問人もなけれは夫より山を下りて軽井沢に出

所なかる初メて人家あり又ビンノ澤平井邑なるあり
三島に行く者ハ此山中より天麻天南星の類多し
五里の山路茅生じて大木なし行て箱根山是高山なり
伊豆天城山 五里 十四里人家ナシ大木多シ熊住 みえて佳景あり

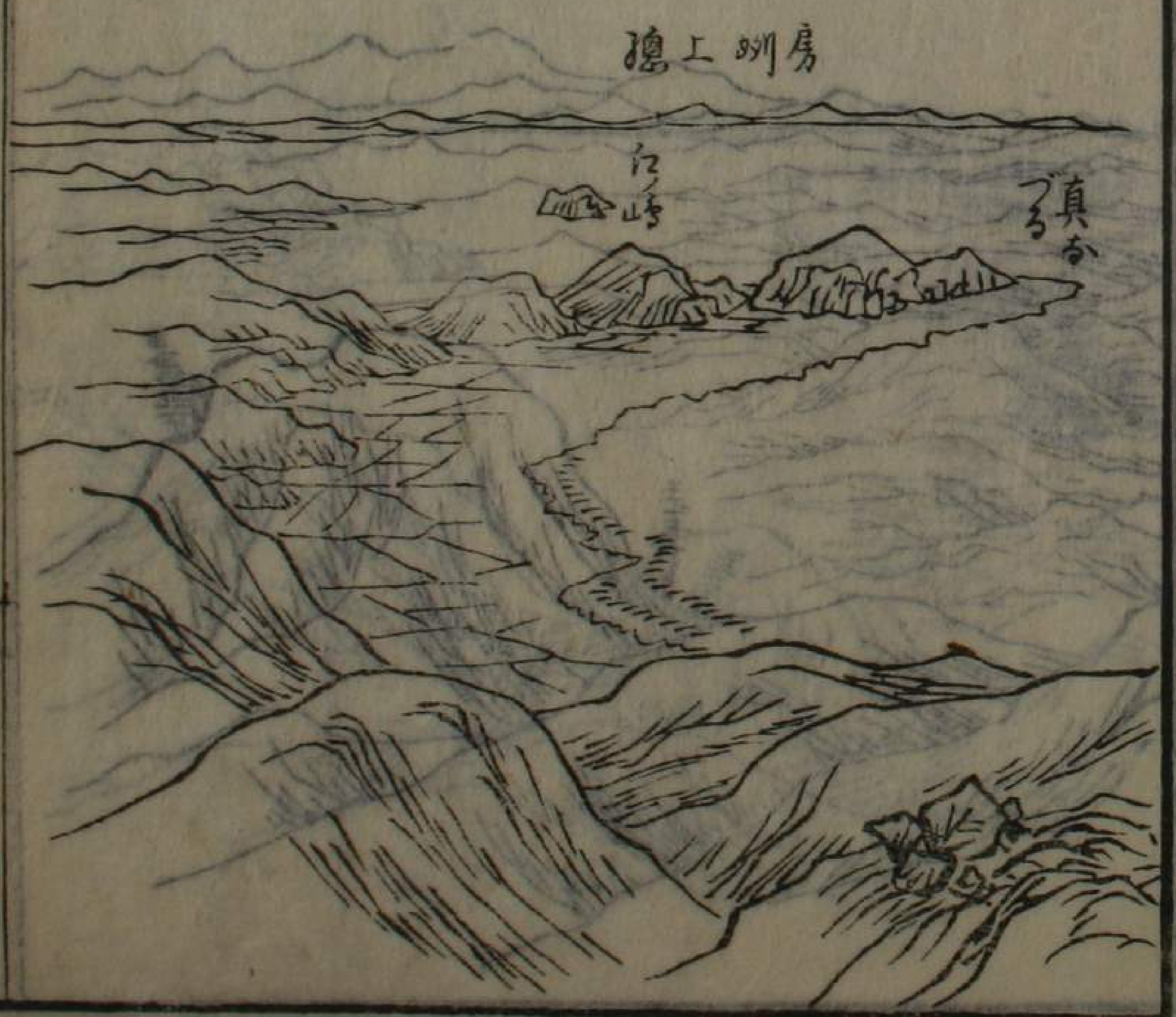
日金(ヒカネ)山頂ハ丸山より南乃方を望 右ハ熱海(アタミ)網代(アジロ)下田(シモダ)海上大島新(ニイ)島三宅(ミヤケ)島見ゆる

日金山頂より
北の方を望む
冨士山左ハ足高
山右ハ二子山



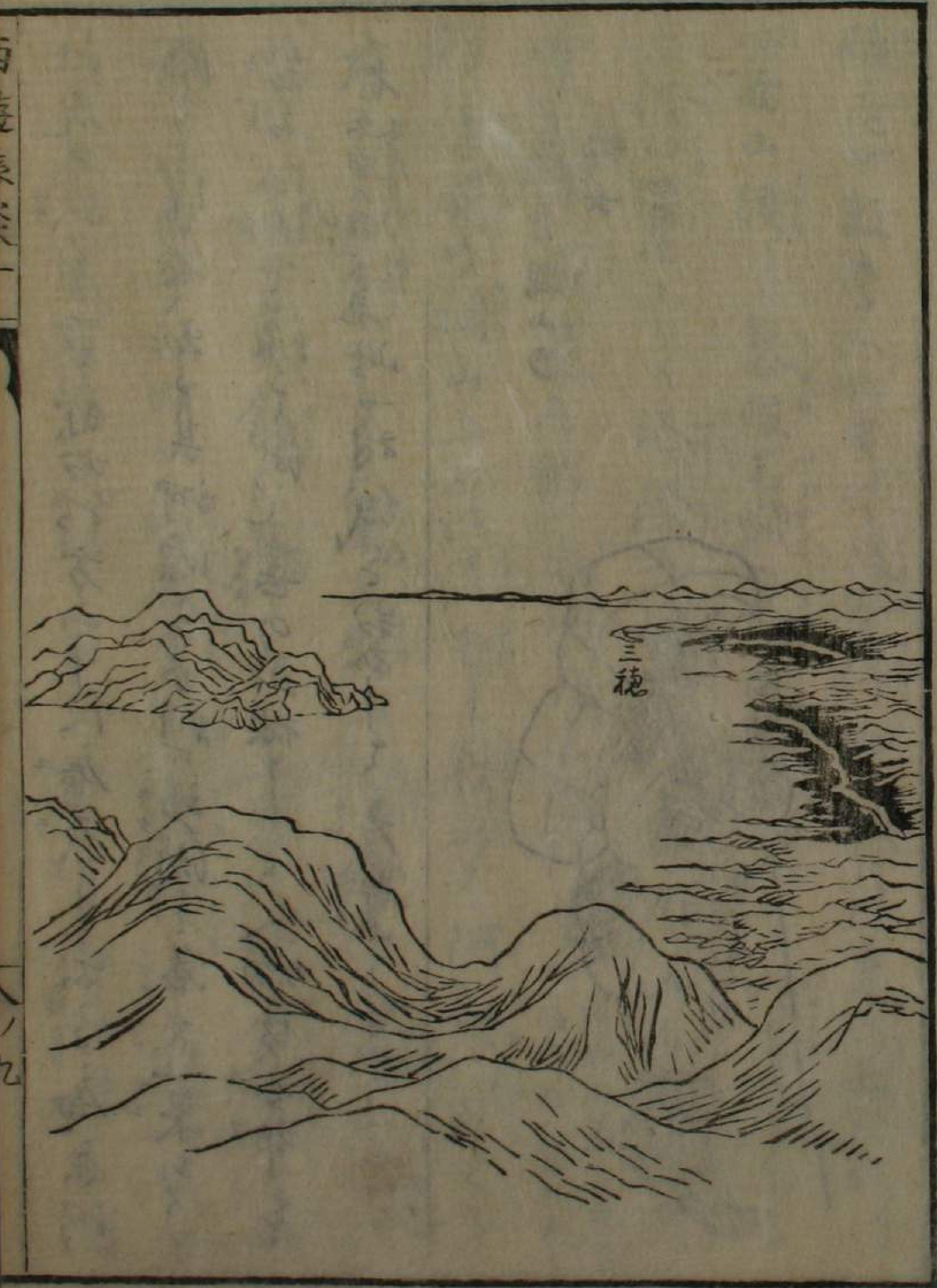


日金山頂より東の方を望



富士川見ゆ
箱根山三島沼津
日金山頂より西の方を望

日金山頂より西の方を望
箱根山三島沼津狩野川
冨士川見ユル



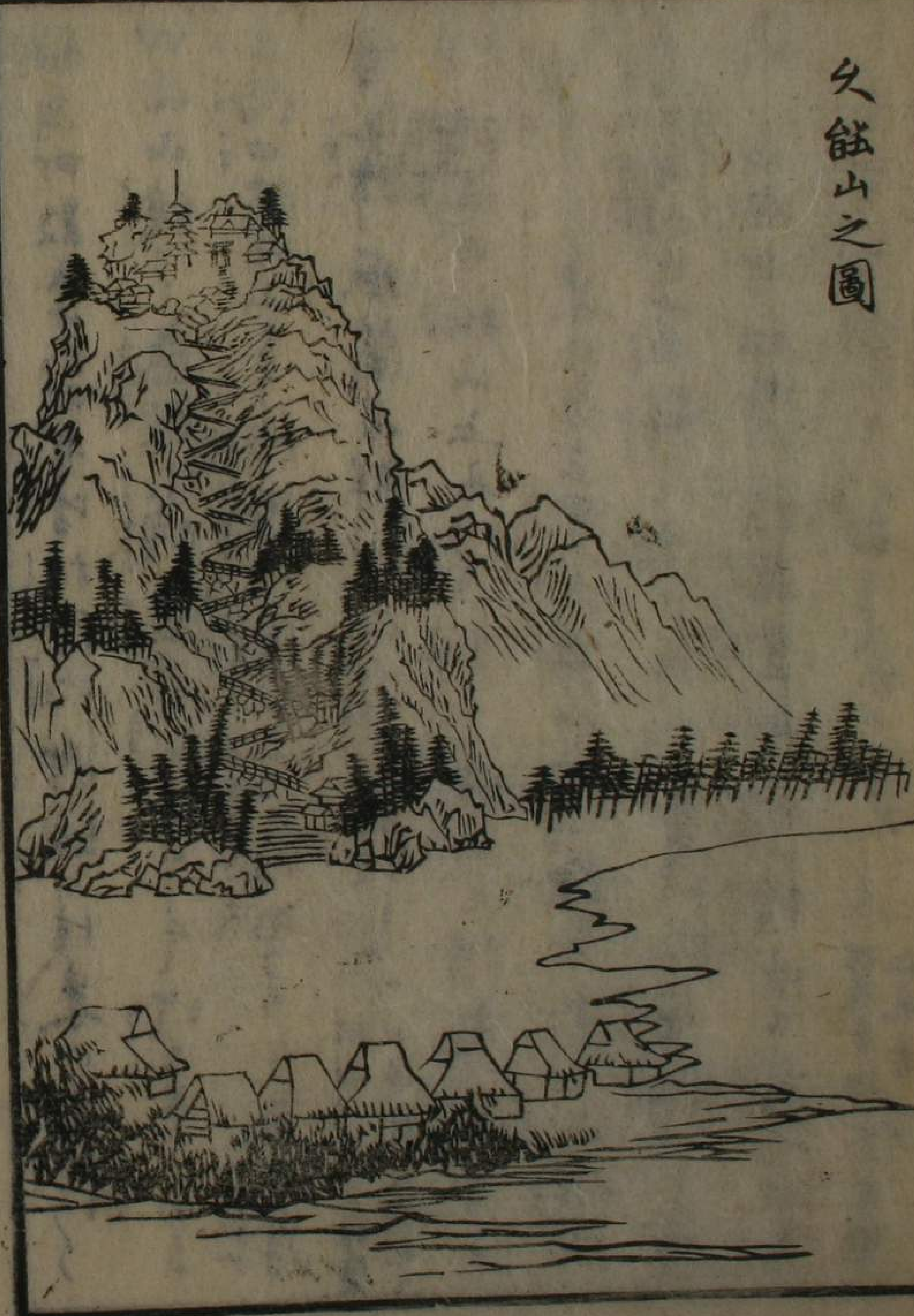
江尻の駅より一里余右の方山中に庵原といふ庵原河流れ清水へ出る其河源をたづぬれば北瀧と名づく飛泉あり岩石を廻て流るゝ渓の甚の山林にして人物皆太布を着（太布八科ノ木ノ皮ヲ以テ製ス）此一村紙を製して産業とす

庵原深山の婦女

駿府町数九十六町有皆板屋作御城は清東の右にあり四面山繞り氣候不順夏月忽ち変じて冷気となる土俗曰冨士山より冷際の風を吹おろすと又冬月雪不降風蘭石解水仙自山谷に生ず（阿部川茶木地塗油蒔画ノ器物色々）多し浅間の祠山上にありかしこ眺めて阿部川を見る

府中より東の方三里久能山なり海を臨て山巓にありし石坂十七曲斜に登る左に五重の塔唐銅の鳥居あり西面本社右に経蔵堂御廟は頂にあり此山を下りて一里余行て八部といふ所十二景あり（往来ヨリ海ノ方一里余 江尻ヨリ入ル）

久能山之圖



駿府町数九十六町有皆板屋作御城ハ清東の右にあり
四面山繞て氣候不順夏月忽変じて冷氣となる
土俗曰冨士山より冷際の風を吹落ゆへなりと

覇王樹花

花ノ色 カバ黄

同全圖

久能寺観音山ヨリ
冨嶽ヲ望圖

八部龍華寺といふ園中に大なる鐵霸王樹甚大樹なり
それより花沢といふ所に久能寺あり（久能山ニアラズ別ナリ江尻海テ）
石坂をのぼりて観音堂あり眺望すれば眼下に清水湊
人家千餘軒あり清水川流れ出て蒼海中に三穂の松原盡
に冨士を望む又難坂薩埵峠由井沖津江尻清見寺
山あり足高山愛鷹山箱根山二子山伊豆鶴巻山鷲頭山
天城山見へて日本第一の風景也
遠州掛川の驛より秋葉山へ行二里山坂を越て川を渡
又ゆく事二里川を越て森宿あり（冨高アリ茶師多シ）夫より行事三里

一瀬といふ所あり此川を越す事四十八瀬あり是より麓
まで三里麓の方に瑞雲坂をのぼり瑞雲寺あり是より
小天龍川舟渡あり掛川を入て山に坂大木多し杉檜の森
山尤高し麓より山に登る五十町唐銅の鳥居あり額金明
嶺。山門に最勝閣本堂に大登山とあり堂ハ南面本尊観
音を安置す鎮守南向権現の社あり寺ハ禅宗秋葉
といふ是より三河國鳳来寺に行道也則寺の後の方坂
を下る事五十町戸倉といふ所あり山坂多し半里余り
犀河舟渡天龍川の源也此邊總じて米なし芋稗を

食も海なくして塩乏し 甚の深山にて猿猪多し
夫より石打へ一里 熊村へ二里 此辺ことに山林幽巌 人烟寂
寞として物さびしき地也 婦人は旅客の荷物を負て賃を
取 男子よりはるかに 海をも見ず平地に人家の並びたる事
なし 熊村より一里半加宇連峠にあり 又行一里
半 巣山村 此所坐頭転しの峠あり 遠州より三河の境の峠
を越 或四十四曲坂をなり 大野まで一里半 此所甚大に深山也
大野は市街 商家多し 夫より板敷川を渡 川の底岩
如板故に名と称す 鳳来寺 麓より五十町山にのぼる

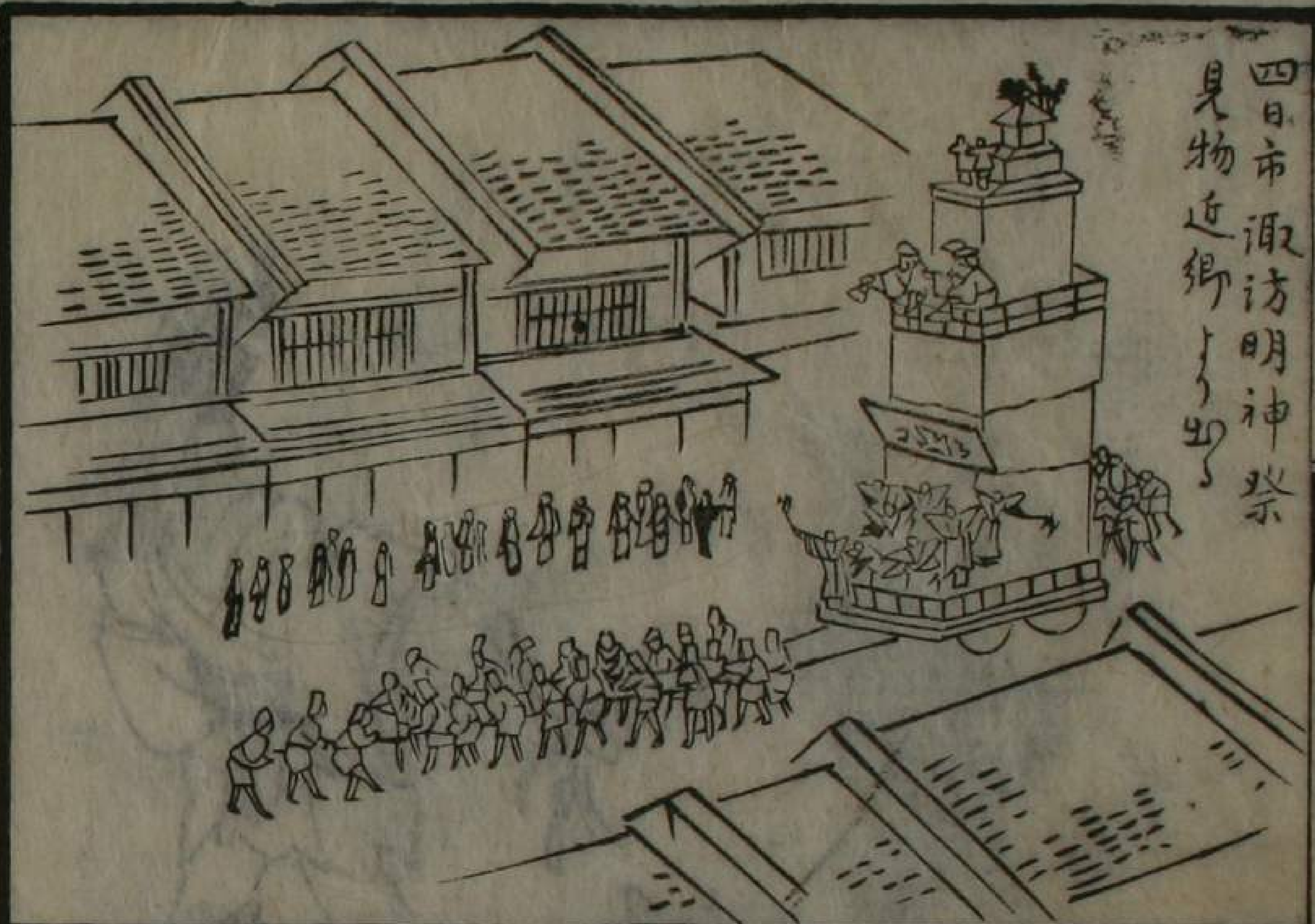
行者越より下一町余登るに皆巌石を攀て絶頂に至る
遠州海遥に見えて山と連て波のごとくに見えて三四町山を
下て石階の上に権現の祠あり 坂の下に薬師堂あり 末社本
堂の後ろに多し 左の方岩に添って塔あり 夫より石階を下る
事九町 麓に十二坊 天台真言二流なり 学頭天台なり
松高院 真言は医王院の二坊也 門前にも角屋町 旅籠
多し ここより滝川へ出る 渓の中を流るる川に舟にて
渡る 銭亀村より滝川と云ふ 新城まで二里 富商多し
夫より野田へ二里十六町 大木村へ三里 豊川を左に見て 小

夫より高戸ヶ原家野ヶ原本野ヶ原をこへて杉原をゆく事一里余漸御由往還へ出る

勢州日永村ツンツク踊之圖
唱(ウタフ)文句(モンク)
おしどろや
かうしろかうしろ
かうしろや ツンツン
ツンツク〱
塲(サカヒ)ヶ濱(ハマ)で
田をも植(ウヘ)る
一本うれしハ
手もと
二本かさねど
数(うる)ふれども

お花(ジ)の来て
富士の山
酒よつれしハ
泉(イツミ)酒(ザケ)
みな〱やろうまい
海うらし
馬でやろうまい
山坂よ
車でやれば
道(ミチ)がなし
テテテツク〱
西の山より
あときらひしを
行てる
しておとまりし
よそにさしを
手切(オキリ)みさしもて
美顔(メヨキ)小女郎よさよ
嬪(ソラ)しよソウソウ踊(オドリ)い
是山でし
ユイトコ〱

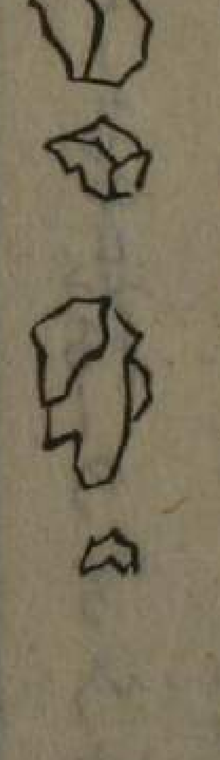
四日市盆踊
おんど唄(ウタ)年ゝ
文句かはる



勢州四日市の驛より石薬師の方の宿日永村まで七月十三日十四日十五日盆中ニツク踊とて小童或ハ十七八の女子又廿歳ばかりのものゝ白きさらしの手拭をかぶりまして腰に扇をさし手を取て輪となり唱此村之西町より此踊を始て一町つゝ唱文句もちがひぬ

七月十六日日永より凡三里余菰野といふ所ある土方侯一萬石の領地之陣屋あり市中一二町夫より東北之方凡十余町にて河原あり川はゞ五六十間常ハ水なし雨降ば漲川源ハ三里を隔湯の山青瀧と名ある所より流るゝ

廿日湯山より行蔵野より二里餘一里もして方一里程の原あり小笹お
ほし白眞桔梗女郎花など秋花盛んに自叢溪河を渡れバ山中に入皆
砂山にして砂流て山骨を顕し大石道路を塞ぐ又行事半里溪
流を挟み岩石ことごとく石頭を露し躍り越え溪流甚深し
又行事四五町にして溪水又同じく躍り越え左右悉く大山にして谷を
なしく人家なき山を挟て坂に屋舎を作る十軒許其半に湯
室に温泉水の如し火を焚き湯として浴する者多し此地嶮岨
にして大樹なし五穀不生此邊土なし皆小石なり大石の
破て砂となるなり



此花岩ヶ谷と云ふ所に多し
岩石に傍て生じ大さ此圖

此山中夏月も冷氣虫も不生
蚊もなし冬月ハ雪深くして
侵みがたし此所より近江國日
野へ山越四里許也人家なし
谷流をつたひの六瀬粮
鮎多しとぞ
七月廿六日廿七日四日市諏訪
明神の祭禮近郷の者
見物に出る山よりすなどと

勢州石薬師より四里一
山中に入石大神と云
數丈に直立して
白石なり

石大神
より廿一
入屏風
岩あり

上ハ九町ばかり間
両岩絶壁白岩ニ
シテ松楓多ク秋ハ
紅葉ヒテ画ノ如シ

作又稲りもある此驛より京に屬す東方の風俗なし
婦人髮の風も皆京の流行を用ひ襷を社に詣る婦女
頭に帽子を被夏月ハ絽を以て製冬月ハ綿をいれつくる
菜名より此邊家作家屋

八月二日日永村を発して神戸に至る三日
に神戸を出て白子観音堂（伊勢参詣道也）夫
より津なる藤堂侯（三十二万石）乃城下より
[illegible]縦横に町続き富商多し雲津川舟
渡此川伊賀山より流出る也夫より又川を
二瀬川といふ此あたり松坂をゆく人家つゞき
富商多し夫より行事四里小畑又新
茶屋といふあり夫を過て宮川乃
舟渡ありて山田人家建続繁昌

の地にて外宮内宮の宮ありて古市中
乃地もつとも倡家多し

六日二見ヶ浦乃方へ山田を発して
山中にかゝりゆく事半里許にし
て川あり塩合川といふ舟わたし
越えて二見ヶ浦にいたるなれより
その浦辺をめぐりて行ゆけば
[illegible]の磯より一村に入川あり
舟にて渡る小山をこえて
又渚辺に出る池の浦といふ
[illegible]島見えて[illegible]松山

にのうし志摩國鳥羽浦とゐる人家多し市街あり
是より四里ほと五十町一里あり此浦ハ西國の方乃船を掛
関東の方へ渡るり日和山登れバ四方乃眺望よし佳景也